

第3回 新たな都市像検討委員会

議事概要

■日程・場所

日時：令和5年8月17日（木） 10:00～11:30

場所：金沢市役所第二本庁舎 3階 2301会議室

■出席者名簿（敬称略・五十音順）

役職	所属等	氏名	備考
委員長	金沢大学 学長	和田 隆 志	
委員	金沢商工会議所 会頭	安 宅 建 樹	
	金沢工業大学 情報フロンティア学部学部長 メディア情報学科 教授	出 原 立 子	
	金沢市社会福祉協議会 会長	高 柳 晃 一	
	(一社) 金沢経済同友会 代表幹事	砂 塚 隆 広	
	ダイヤ精機(株) 代表取締役 内閣官房 新しい資本主義実現会議 委員	諏 訪 貴 子	オンライン
	金沢市公民館連合会 会長	竹 上 勉	
	金沢学院大学 教育学部教育学科 教授	田 邊 俊 治	
	未来へつなぐ金沢行動会議 代表	谷 口 亮 輔	
	石川工業高等専門学校 副校長 建築学科 教授	道 地 慶 子	
	金沢市町会連合会 会長	中 川 一 成	
	金沢まちづくり学生会議 代表 (金沢まちづくり学生会議 副代表)	中 谷 陽 (村木 照太郎)	オンライン
	金沢市校下婦人会連絡協議会 会長	能木場 由紀子	
	(一社) 金沢市観光協会 副理事長	八 田 誠	
	(独) 都市再生機構 東日本都市再生本部 副本部長	松 永 浩 行	
	金沢大学 融合研究域融合科学系 教授	眞 鍋 知 子	
	東京女子大学 副学長 現代教養学部国際社会学科 教授	矢ヶ崎 紀 子	オンライン
	金沢美術工芸大学 学長	山 崎 剛	
(一財) 石川県芸術文化協会 理事長	吉 田 仁		
事務局	金沢市長	村 山 卓	
	金沢市副市長	新 保 博 之	
	金沢市副市長	山 田 啓 之	
	金沢市都市政策局長	村 角 薫 明	
	金沢市都市政策局企画調整課長	津 田 宏	

■次第

1. 開会
2. 市長挨拶
3. 議題 新たな都市像の素案について
4. 今後のスケジュールについて
5. 閉会

■配布資料

<資料1> 新たな都市像の素案について

■議事概要

1. 開会
2. 市長挨拶
3. 議題 新たな都市像の素案について

砂 塚 委 員：・目指すべき将来像（案）について、「共創」という言葉が一般市民にとっては、なじみが薄い言葉のように感じる。他に分かりやすい表現はないか。

- ・サブタイトルが「心豊かで活力ある未来を、すべての人々と共に」となっているが、この中に「共に創りあげていく」という意味を反映してはどうか。「世界に誇る文化都市金沢～心豊かで活力ある未来を、すべての人々と共に創りあげていく～」としても良い。

村 山 市 長：・これまでも様々なところで「世界に誇る文化都市」という言い方をしてきたが、「文化都市」がどんなものかイメージすることが難しいのではないかと自問自答している状況であった。

- ・金沢市の「文化」は、幅広く、どのような文化都市と明言して良いのか検討した結果、「共創」という言葉を用いることにした。
- ・ただし、馴染みが薄いという意見があったため、サブタイトルの「すべての人々と共に」の「すべての人々と」を除き、「共に創りあげる」として、「共創」の意味を補充することを検討していきたい。

眞 鍋 委 員：・「世界に誇る」という表現について、前回、委員から「金沢の伝統や文化は既に世界水準であり、言わずもがなだ」という意見があったが、「世界に誇る」を残した理由は何か。

- ・個人的には、「世界にひらく」の方が良いと思うがどうか。

事務局（津田）：・「世界に誇る」という表現については、これまでも「世界に誇る文化都市」と打ち出しているという点、また、これまで視座を世界におき、市政を運営してきたことを鑑み、これを継承していく視点を踏まえ、使用している。

八 田 委 員：・新たな都市像の特徴は、市民と共に創りあげることであり、アピールしていきたい。資料の2ページに「都市自治体」という言葉があり、都市が力を発揮していくことが世界にも貢献する文脈を読み取ることができ好感が持てる。

- ・新たな都市像を世界に向けてアピールしていくために、将来像の英語表現を検討し、発信していけると良い。
- ・魅力づくりについては、発信を強化すべき。また、クリエイティブも重要。8ページの（3）に「城下町に残る質の高い文化のさらなる魅力向上」とあるが、「城下町に残る」と聞くと、長町武家屋敷や金沢城のようなハードがイ

メージされる。本来は、そこに残る精神的なものがイメージされてほしいため、「歴史伝統に根ざした質の高い文化のさらなる魅力向上」とした方が、一般的に分かりやすい。また、「魅力向上」ではなく「魅力創造」とし、将来を見据えた表現にした方が良い。

- ・ 8 ページ（4）の「歴史や伝統に裏打ちされたほんものの魅力発信による文化観光の推進」とあるが、「ほんものの魅力」は定まったものではなく、今後創造する。「歴史や伝統に裏打ちされたほんものの創造と魅力発信による文化観光の推進」に表現を変えてはいかがか。

矢ヶ崎委員：・ 2 ページの策定の趣旨について、都市間競争が始まっているということ、不確実性の中で人々が都市を選んでいることを把握した上で、選ばれる都市になるためにはと続いており、説得力があるものになっている。

- ・ 金沢は文化を軸としているため、発信が重要になる。単に発信するのではなく、正しく、そして金沢のファンになってもらうためにコミュニケーションを伴った伝え方が必要。そのためには、センスやスキルがある人材が必要であり、伝えること、理解してもらうことに長けた人材が金沢で活躍できると良い。その人材の多くは、デジタル技術を使いこなすことができ、世界が欲しがるような人材だろう。
- ・ 新たな都市像を具現化していく際には、KPI を明確に設け、進捗管理をしながら戦略的に進めていくことを推奨する。
- ・ 8 ページの（1）は環境の充実、（2）は文化の継承と発展、（3）は文化の創造、（4）はブランド力及び発信、と解釈できるが「発信」という表現がそれぞれの項目に、少しずつ入っているため整理してはどうか。例えば、（1）に「デジタル技術を生かした文化の発信」とあるが、対象が市民であれば、一方通行のイメージがある「発信」ではなく、コミュニケーションのイメージがある「共有」に変更した方が、将来につながっていく。また、（4）は、情報発信の鍵になってくると思われるため、「発信」の要素は（4）に整理するとより分かりやすくなる。

吉田委員：・ 金沢の個性である文化を礎に多様な人々が力を出し合いながら金沢のまちづくりを進める将来像と、それを支える5つの基本方針については良くできている。ただし、理念を述べるだけで終わるのではなく、概ね10年後を目標とした計画であるならば、誰がどのような役割意識をもち、どのように行動していくのかのスケジュール感等を具体的に明示していくことが重要。

- ・ 文化の担い手育成のために、子どもの頃から身近に文化を感じて馴染んでもらえるように体験教育の充実が必要。これまで伝統文化や伝統芸能の体験会は、金沢市の協力で、年1回程度開催してきたが、毎年あつという間に予定定員が埋まる。本格的に稽古したいが敷居が高く、一步を踏み出せない子

どもたちに対し体験会はかなりの需要があるため、年1回ではなく、年2～3回に増やしても良い。文化の土台と担い手づくりを新たな都市像の中でも強調してもらいたい。

- ・文化の支え手について、文化観光で金沢を訪れる人も金沢の文化の支え手。金沢は、来街者の知的好奇心を満たし、学ぶ楽しさを教えてくれるまちでありたい。まちを散策して楽しめる施設は十分あるが、文化を体験できる場所は足りておらず改善の余地がある。実際に金沢を訪れて文化を体験できると金沢の文化の理解が深まり、より一層、文化の支え手としての力が高まる。文化観光の推進の中に、踏み込んだ取組を触れていただきたい。
- ・オーバーツーリズムの考え方も触れて欲しい。人をたくさん呼び込めばいいとは誰も思っていないが、特定の施設、エリア、季節、時間に観光客が集中している現状だ。例えば、季節ごとに異なった味わいを楽しめるような観光誘客策を取る等、観光客を分散させる取組も必要であり、文化観光の本領を發揮できる。住んでいる人が幸せではない新たな都市像はありえない。住む人にとっても、来る人にとっても満たされる都市像にしていきたい。

高 柳 委 員：・6ページに各分野への横断的視点があり、「若い世代、移住者、民間企業など、地域に関わる多様な人々の視点・活力の活用」の「人と人、人と社会がつながり支え合う環境の充実」については、福祉だけではなく、地域活性化や産業創出の面でも大切な視点。

- ・9ページの(2)誰もが安心して暮らせる地域社会の実現にも「人と人、人と社会がつながり支え合う環境の充実」と記載があるが、全体的な視点として、記載するのは良いが、個別の項目となると「環境の充実」という箇所が抽象的だ。「つながり支え合う地域福祉の推進」や「福祉環境の充実」等、適当な補足が必要。なお、つながることと、支え合うことは別の概念であり、単につながりだけでなく、つながり続けることが本質であり、その後に支え合うことができる。行動計画策定の際に、留意していただきたい。
- ・目指すべき将来像(案)である「世界に誇る共創文化都市・金沢」については、共に創るという視点と、共生社会という面で、共に生きるという視点どちらも包含された大切な言葉だと解釈した。

中 川 委 員：・9ページの(1)多様な主体の協働による元気で活力あふれる地域コミュニティの醸成に「民間や学生など多様な主体の活躍と世代間の連携による地域コミュニティの活性化」とあるが、連携を取る意味は、次世代にコミュニティを継承していくことだ。

- ・「持続可能なコミュニティを支える基盤の強化」について、現状の地域コミュニティもデジタル技術を活用しながら負担の少ない、効率的なコミュニティの形成が求められている。そのため「デジタルを活用した持続可能なコミュ

ニティを支える基盤の強化」としても良いだろう。

- ・「地域への誇りや愛着を醸成する地域活動への参加促進」について、自分の住む地域の活動に参加しながら地域の愛着を醸成していくことだけでなく、金沢市には特徴のある地域活動が行われている地域も多くあるため、それらの情報を知ること、より自分の住んでいる地域を深く理解し、愛着をもつことができるため、地域活動の他地域との連携の視点もあると良い。

- 眞鍋委員：
- ・ 2 ページの策定趣旨の最初の文章について、主語が分かりづらいため見直しが必要。
 - ・ 5 ページの最初の文章に「『木』など」と記載があり、「木の文化都市」のことだと思うが、唐突感があり、分かりづらい。
 - ・ 8 ページの（4）世界の人々が憧れ滞在したくなる都市ブランド力の向上に「満足度の高い来街者への受入環境の充実・強化と交流の促進」とあるが、「来街者への満足度が高い受入環境の充実・強化と交流の促進」等への文章の見直しが必要。
 - ・ 9 ページの（4）人と自然が共生する地球にやさしい生活環境の形成の「ゼロカーボンシティの実現に向けた脱炭素化の推進」、「ごみの減量と資源循環の推進」に横断的視点として、「多様な視点・活力」のマークがついているが、これで良いのか分かりづらいため見直しが必要。
 - ・ 3 ページの（1）人口減少・少子高齢化の進展の説明文の中に、「公共施設の統廃合」という言葉が出てきており、12 ページの（5）災害に強く効率的で質の高い都市運営の実践にも、「公共施設保有量の最適化」という言葉がある。前回までは「都市基盤施設」という言葉が用いられており、それが今回「公共施設保有量の最適化」に、いきなり変化した印象を受ける。

- 事務局（津田）：
- ・ 公共施設保有量の最適化については、本市で策定している「公共施設等総合管理計画」の方向性のひとつとしている。人口減少社会において、施設の保有量については、時代の変化に応じて最適化を図っていく必要があるという意味での記載である。「公共施設等総合管理計画」の表現に併せて、庁内策定本部で検討し表現を変更した。単に減らすのではなく、跡地等の有効活用を検討していくことで、地域力を高めていきたいとの思いで「公共施設保有量の最適化と跡地等の有効活用」と記載している。

- 竹上委員：
- ・ 5 ページの「『木』など」については、個人的には推進したい。緑の環境は金沢の魅力のひとつ。表現方法はともかく、何らかの形で入れていただきたい。
 - ・ 「世界に誇る」は「世界にひらく」という表現でも良い。
 - ・ 人づくりについて、金沢の各地域にはそれぞれの歴史・文化がある。地域に眠る歴史文化を大事にしていくことが人づくりの大きなポイント。また、（4）

学びの文化の形成と情操教育の推進の「地域の歴史・文化を学ぶ機会の充実」も同様に重要。金沢市では、地域で受け継がれている歴史・文化を「地域のお宝」として認定する事業があるが、地域の歴史・文化を理解することを地域の人々と共に、そして学校教育の中でも強化していく必要がある。強化していくことで、(1) 妊娠・出産・育児の切れ目のない子育て支援の充実の「教育・福祉の連携による総合支援体制の強化」につながり、地域の公民館が場になっていく。

- 田 邊 委 員：
- ・何を創造するのが重要であり、仕組みを創造的にするのか、活動を創造的にするのか、多様な視点を含みとして共創的に展開していただけることを願う。
 - ・新たな都市像全体の方向性について、領域的かつ横断的視点は良い仕掛けだ。
 - ・人づくりの要は、人と人が出会ってつながり、協働して取り組むことが可能になるような場や仕組みをつくること。
 - ・(1) 妊娠・出産・育児の切れ目のない子育て支援の充実は、段階設定が具体的にすぎると感じるため、総合的な表現にした方がよい。
 - ・(2) すべての子どもの可能性を引き出し生きる力を育む教育の実践の「特色ある教育モデルの構築と実践」について、進んで学びたいような教育モデル、子どもたちが学び合い、育ち合うような特色ある教育モデルの展開を期待したい。また、「魅力ある教育施設の設備と学習環境の充実」とあるが、「魅力ある教育環境の充実」という表現でも、教育施設及び学習環境の意味を包含できる。
 - ・(4) 学びの文化の形成と情操教育の推進に「文化芸術体験による豊かな心と創造力の育成」とあるが、本市の文化資源や環境を十分に活かして、文化芸術最前線の当事者が学びの場に直接関わる仕組みや場を創出することによって、豊かな心と創造力を引き出せるような展開を期待したい。

- 能 木 場 委 員：
- ・古いものに新しいものを「しなやかに」取り入れてこそ良いものや新しいものが生まれ、それを目的に県外、海外から多くの人を訪れている。今後も「しなやかに」金沢のまちづくりが行われていくことを願う。
 - ・金沢の大学は地元よりも県外の学生が多く在籍している。学生が大学、大学院にいる間に、金沢の良いところを十分に認識し、地元の企業に勤め、いずれは金沢で所帯をもち、金沢に住んでいただきたい。
 - ・(3) 学都の強みを生かした次代の担い手育成とあるように、他の県からの移住者も金沢の次代を担う人材として地元で根付いていただきたい。
 - ・(4) 学びの文化の形成と情操教育の推進に関連して、地域独自の伝統芸能や民謡を絶やさずに、次代につないでいくために、金沢民謡保存連合会を設立しており、現在13～14団体で構成されている。金沢は謡や能楽、古典芸能が盛んではあるが、郊外、海側、山側の各地域に昔から伝わっている民謡

がある。地域の子どもたちは太鼓や笛、三味線等の囃し方の仕事をしている。これからも地域に長年伝わっている伝統芸能を次代に伝えていきたい。

- 安宅委員：・先月20日、日本商工会議所が「人口減少に直面する地方都市の再生に向けた意見」を政府関係機関に提出した。サブタイトルが「中心市街地の再生・活性化による地域経済好循環の実現を目指して」となっており、まちの活性化の基本は、経済の循環がスムーズに進んでいることだと考えられる。
- ・経済循環を促進するまちなか再生を支援することが必要。10年後の金沢を考えると、人口減少や経済の縮小は避けられず、民間投資が増えないことが想定される。その際には、国や自治体が公的支援を行っていくことが必要。行政が積極的に関与して地域の経済循環を良くしていくことが大切。
 - ・公民共創まちづくり体制をつくることが必要。中心市街地活性化協議会があるが、機能していない。既存の協議会の機能を高める、商店街組合の活性化を図るためには、専門家派遣、面的伴走支援をしながら公民が連携し、まちづくりをしていく必要がある。
 - ・民間によるまちなか投資の喚起が必要。金沢の中心商店街にも老朽化した商業施設が多く、防災の観点からも当面の大きな課題。脱炭素というキーワードで、国の補助制度もあるため、行政が補助制度を引っ張ってきながら財政支援をし、民間によるまちなか投資も行政の支援によって進めていくことが大切。同時に、まちなかに店舗を出店したらインセンティブを出す等を行い、金沢市全域に広がっている商店街をまちなかに取り戻していくことも大切。
 - ・PPP、PFIの手法を活用しながら、まちの真ん中に経済の中心がくるような施策を進めていくことが、金沢の大きな課題。早めに手を打つことで、シャッターが下りているようなまちにならないように協力していきたい。

- 出原委員：・横断的な3つの視点は、将来像と基本方針を実現していく際にも重要な視点。個々の基本方針を市民に示す際に、現状は赤、青、緑で色分けされ補助的にキーワードが追加されているが、これがないと市民への伝わり方が変わってしまう。今後とりまとめの際にも、3つのキーワードを分かりやすく表現できると良い。
- ・金沢の個性を活かしながら、金沢の産業を保ちながら、成長していくことが必要。取り巻く環境の変化や問題に対応するために、多様性やデジタルをキーワードに、金沢を盛り上げていくような仕事づくりにつながる指針になることを願う。

- 諏訪委員：・AIに負けない人間の能力の要素は7つある。1つ目は創造性と創造力を持つこと、2つ目は高度なコミュニケーション能力、3つ目はエンパシーと感情認識、4つ目は経験値と知識の蓄積、5つ目はリーダーシップと意思決定力、

6つ目は倫理性と社会的責任、7つ目は健康的なライフスタイルであり、これらは人間独自のものであり、組み合わせながら成長していかなければいけない。今回提案された素案を見てみると、各基本方針の中に7つの要素は含まれている。

- ・ 4ページのポンチ絵について、各方針が独立しており、各方針を達成していくことで、新たな都市像が具現化されていくように見える。実際は、魅力があるまちに、人々が集まって暮らし、教育を受けて、仕事をして、活気が溢れるといったように各基本方針はつながっていて、これらを全て達成することで新たな都市像が具現化されるといった趣旨である。ポンチ絵を公にするのであれば、全体がつながっていることが分かるような表現方法の工夫が必要。
- ・ 3ページ(4)北陸新幹線延伸の好機と都市間競争の激化の説明の中に、「金沢の拠点性を高める」、「北陸のリーダーとしての役割が期待されている」と記載されているが、10年後に金沢は人や仕事のハブ拠点になると宣言しても良い。
- ・ 東京から見ると、金沢の方言は魅力のひとつ。全国各地で若い人が方言を話さなくなっているため、方言は絶滅の危機にある。5ページに「金沢の所作や言葉」と記載があるように、外の人間からみると大切にしていきたい。「りくつな」金沢を目指していきたい。

- 道 地 委 員：
- ・ 「共創」は何を一緒につくるのかイメージが湧かない。サブタイトルを「すべての人々と共に、心豊かで活力ある未来を」とするとイメージがつきやすくなる。また、「世界にひらく」の「ひらく」は「拓く」が良い。
 - ・ 6ページの、「本市の文化を強みに多様な分野への活用」の5項目目と、「あらゆる分野におけるデジタル化の推進」の3項目目が同じ文章になっている。前後の文章を入れ替えると強調することができる。例えば、「文化・産業の融合による産業活性化とDX・GXの活用」とした方が文化を強調することができ、「DX・GXの推進による文化・産業の融合」とするとデジタルを強調することができる。
 - ・ 8～12ページまで、横断的な視点が各方針の項目の文頭にマークが追記されているが、何もマークがついていない項目の中には、マークを追記した方が良いと考えられる項目も見受けられる。マークを追記できる項目は全て追記してはいかがか。ただし、現状のマークだと文字の量が多くなり場所を取ってしまうため、赤丸、緑丸、青丸のように色マークだけにする方法も考えられる。
 - ・ 12ページの(5)災害に強く効率的で質の高い都市運営の実践の「公共施設保有量の最適化と跡地等の有効活用」については、「公共施設」を「都市施設」とすることで、公園や道路等、公共的な意味を含ませることができる。一般

的に、都市計画においても「都市施設」と表現する機会が多いため、「公共施設」よりも広義の活用のイメージができる。

松 永 委 員：・将来像の「世界に誇る」という表現は、多様な人々・主体と共につくりあげていくこと、つながっていくことを考えると「世界に拓く」という表現が良い。

- ・6ページに横断的な視点の「あらゆる分野におけるデジタル化の推進」について、項目を見るとDXが目的化されている表現が多く、目的と手段が逆転しているように感じる。DXが目的にならないように見直しが必要。
- ・基本方針5の都市づくりの分野は、全ての基本方針を下支えしているが、産業支援の視点が入っていない。持続的に産業発展をさせていくことを考えると、イノベーションをどのように起こしていくかという議論になる。イノベーションについては、株式会社まちづくりエイトイブの寺井氏代表取締役が整理している、クリエイティブシティ論が参考になる。クオリティの高いアーティストをコアに、デザイナーやプログラマーといった創造的な人材が集まり、その外側に知的人材が集まってくるという理論で、感度の高い人が集まりやすいカフェなどのショップを運営する人が集まってこない、自然体で創造的な人材や知的人材が交わる場がないのではないかということだ。基本方針の中に、新しく項目を追加するか、行動計画の中で表現いただきたい。

谷 口 委 員：・都市像や今後の行動計画について、市民からフィードバックをもらいながら、共に高め合うことができる仕組みづくりやプラットフォームの活用をしていけると、市民も積極的に興味を持って参加できる。

- ・私たちの世代や私たちよりも下の世代は、Instagram、YouTube、TikTok等のSNSが流行しており、テキストではなくビジュアルでの情報伝達に慣れている。コストパフォーマンスも大事だが、タイムパフォーマンスがより重要視されており、いかに効率化できるのか、短い時間で良い効果が得られるのか、という視点で若者は考えているため、都市像や行動計画を若者に伝えていくためには、文章だけではなく、ビジュアルと時間を意識することが重要。若者に伝えるプロの人材を外部から連れてくるなどして、見せ方を意識することで、関心が湧くのではないかと思う。できれば、そこに自分自身も関わりたい。

村 木 委 員：・10年後の金沢のまちづくりの指針が提案されているが、人によって捉え方が変わってしまうように感じる。大学でまちづくりを専攻しているが、まちづくりにおいても、それぞれが目指しているものは違い、「まちづくり」という言葉についても考え方が人それぞれである。そのため、抽象的な言葉で将来像を示すと、市民としては卑下した見方をする人もいる。今後、具現化していくことで、細かくて目が届きにくい指針でさえも市民に理解してもらうことが重要。また、「文化」についても伝統芸能を「文化」だと思う人もいれば、

金沢方式を「文化」と思う人がいる等、抽象的な言葉を使うと捉え方が広がってしまう。具体例を用いて市民の生活に寄り添った指針を示していければ良い。

- 山崎委員：・「共創」という言葉が一般化してきているとはいえ、分かりづらいとすると、サブタイトルで噛み砕く必要性が生まれる。「すべての人々と共に、〇〇の未来をつくる」とした方が良い。〇〇の部分は、新たな都市像のすべてを形容する言葉が入ると考えられるが、それは難しいため、「すべての人々と共に、未来をつくる」とすることで、「共創」を説明できる。
- ・「共創文化都市」をどのように英語で翻訳するか検討する必要がある。「共創文化都市」を直訳ではなく、これまで使われてきた、クリエイティブシティ、イノベーションシティ、スマートシティ、コンパクトシティ、フィフティミニッツシティ等の使い古された表現を、批判的に取り込んだ概念として訳すことができると良い。
 - ・都市のブランディングを考えると、都市軸、中心市街地の活性化は今こそ取り組むべき課題。都市間競争がこれからさらに激しくなっていくことが予想される。金沢市としては、今後10年がチャンス。国家頼みや補助金頼みにならない、都市軸、中心市街地の活性化を力強く進めていただきたい。金沢美術工芸大学としても貢献していきたい。

- 和田委員長：・今後は、どのように広め、伝えていくかが大切。伝えていく際には、市民あるいは国際的な視点が必要であり、英訳も踏まえて議論をしていきたい。
- ・都市像をどのように具体化していくかも大切。行動計画の策定に係ってくると思うが、作っただけではなく形にしていきたい。
 - ・今後10年のスピード感はとても早いことが予想される。KPI等で進捗管理をしながら検証し、より発展・継続させていくプラットフォームを併せて考えていきたい。

4. 今後のスケジュールについて

5. 閉会